

東アジアにおけるD・ボンヘッファーの受容と影響⁽¹⁾

山崎和明*

目次

- 一 はじめに
- 二 日本
- 三 韓国
- 四 台湾

キーワード：ボンヘッファー受容、韓国ボンヘッファー研究、台湾ボンヘッファー研究

* YAMASAKI, Kazuaki 本学社会学部教授、法学博士

一 はじめに

東アジア全域におけるディートリヒ・ボンヘッファー（一九〇六—一九四五）の受容と影響の総てを扱うには、筆者（山崎）の能力と紙幅の限界を超える。現在、「ボンヘッファー研究会」を立ち上げているのは、日本、韓国、そして中華民国（以下「台湾」と呼ぶ）である。他の東アジア諸国にも、ボンヘッファー研究者がおり、ボンヘッファー研究会があるとしても、国際ボンヘッファー学会には連なっていない。

アジアで最初に設立されたボンヘッファー研究会は、一九七八年設立の日本ボンヘッファー研究会である。一九五〇年代より日本各地において個別のボンヘッファー研究が積み重ねられ、全国レベルでの学会成立に至った（以下巻末の注）。以来、三二年もの歴史がある。韓国では、一九八九年に全国レベルでボンヘッファー研究会が設立され、二年が経過した。台湾においてボンヘッファー研究会が設立されたのは、中原大学「漢語基督教」神学会が母体となって、ボンヘッファー生誕百周年記念セミナーが開催された二〇〇六年で、設立後まだ四年である。以下、歴史的足跡に即して、日本、韓国、台湾の順序で、それぞれの国におけるボンヘッファーの受容と影響を考察する。

二 日本⁽³⁾

戦時下の日本には、「ドイツ教会闘争」（一九三四—一九三八）の戦士であり、反ナチ抵抗運動に乗り出した神学者・牧師であったボンヘッファーのような人物は存在しなかった。戦時下、日本の一部の良心的なキリスト者には、ドイツ教会闘争の情報は届いていた⁽⁵⁾。しかし、ドイツ教会闘争のような教会的抵抗は起きなかった。いわんや一九四四年の「七月二〇日事件」（ヒトラー暗殺クーデタ）のような計画も起こらなかった。

日本は、当時も、そして現在も、キリスト教国ではない。宣教百年記念の『キリスト教年鑑一九六〇年』によれば、一九三九年には、プロテスタント系が二三万二四六三人で人口比〇・三二八％、カトリック系が一万七二七八人で人

口比〇・一六五%、合わせても〇・五%に満たない^⑥。また同書によれば、敗戦直後の一九四七年には、プロテスタント系が二〇万七一人（人口比〇・二五六%）、カトリック系が一万八〇人（人口比〇・一四一%）で、キリスト者の総数は三十一万一人で、人口の〇・四%に満たなかった。日本のキリスト者がマイノリティーであることは、現在も変わらない。二〇〇九年の『キリスト教年鑑』によれば、日本のキリスト教徒（プロテスタント、カトリック、オーソドクス）は、一〇九万二七二三人（人口比〇・九%）である。それに対して、二〇〇八年の文化庁の統計によると、神道系が一億五八二万人、仏教系が八九五万人で、合計すると、既に日本の人口の二倍弱である（重層信仰）。日本のキリスト教会は、かつて今も神道や仏教という二大宗教のような影響力を持っていない。

非キリスト教国の日本では、欧米のキリスト教国とは異なり、国王、大統領、首相の上にお存在するような創造神は認められていない。一八六八年に政権が徳川家から天皇家に戻って（大政奉還・明治維新）、天皇が唯一の主権者、君主となった。一八八九年の大日本帝国憲法が發布されてから敗戦の一九四五年まで、天皇家の宗教（神道）が、いわば国教であった。神道によれば、天皇は祭司であるとともに祭神でもある^⑦。政治的君主であると同時に宗教的「現人神」として君臨した天皇の地位は、独裁者ヒトラーですら手に入れることはできなかった。つまり、現人「神」である天皇の上にはもはや神は存在せず、天皇は、政治的最高権力者であると同時に宗教的神の權威を帯びた存在であった。したがって日本では、君主に抵抗することは、神に抵抗することを意味した。日本の政治思想においては、モナルコ・マキのようなヨーロッパ的暴君放伐説は成立せず、社会契約論や統治契約論のように自然法や自然権を根拠に抵抗権や革命権が主張されることもなかった。勿論、開国後、欧米からの移入された学問理論をもとに社会契約説が説かれ（たとえば中江兆民）、抵抗権・革命権を認めた憲法草案も存在した（たとえば植木枝盛「大東洋日本国憲按」）。

〈戦争責任〉

こうした精神風土の日本では、本来、キリスト者こそ地の塩、世の光として抵抗できる存在のはずであった。なぜなら、唯一絶対の神を信じ、「人に従うよりは神に従うべき」存在であるから（使徒行伝五章二九節）。しかし、キリスト教は外国から移入された宗教であり、戦時下の一般的日本人にとっては、ほぼ敵国宗教であった。マイノリティーな存

在であった日本のキリスト者は、当時、社会から孤立したくないと考え、天皇制軍国主義国家においても愛国主義的な皇国臣民であることを証しする忠誠競争に駆られた。また制度としての教会も、自己保身のために時代精神に順応し、国家権力に協調していく誘惑に陥った。こうして、国家権力と足並みをそろえて協力する「協調型」路線が生じた。当時のキリスト者は、「協調型」に加えて、概ね以下の四類型に分類される。

「隱遁型」は、〈擬似ルター主義的三王国論〉あるいは〈擬似バルト主義的三元論〉に立つて、政治と信仰の世界をきつぱりと分け、みずからが国策に手を貸すことはなくとも、沈黙を守って静観し、キリスト者としての政治的責任を回避した。

「積極型」は、いわゆる日本版ドイツのキリスト者＝日本的キリスト者である。〈日本のキリスト者〉は、日本神話や国家神道との融和を図り、キリスト者でありながら天皇制支配体制を支える神道の祭儀への参加を拒む理由を一切なくした。

「受難型」は、少数派であった。そこには、ホーリネス系のグループの人たちがいた。⁸⁾しかし彼らは、人間の尊厳や基本的人権、あるいは平和や自由のために積極的に抵抗に出たというよりは、天皇制軍国主義の支配体制側からの政治的宗教的干渉や弾圧に対して、消極的な不服従（服従拒否）を実践した。一部には、死に至るまで信仰に忠実な人たちがいた（パウル・シュナイダー [Paul Schneider, 1897—1939]・タイプ）。

「抵抗型」は、例外的であった。教会組織を持たない無教会の一部の人々（浅見仙作「二八六八—一九五二」、矢内原忠雄「二八九三—一九六一」、イシガ・オサム「一九一〇—一九九四」など）や、異端であるエホバの証人の人々⁹⁾（ものみの塔、明石順三「二八八九—一九六五」、他多数）は、国家批判を行い、非戦論（戦争反対）を唱え、兵役拒否に至る抵抗の姿勢を貫いた。当時、日本本土では、一三四名の教師と信徒の逮捕、そのうち七名殉教。二七〇の教会が閉鎖された。¹⁰⁾

〈戦後責任〉

一九四五年八月一日、大日本帝国は、ポツダム宣言を受諾して無条件降伏した。敗北後、アメリカ力の占領下で、国

民主権原理（象徴天皇制）、平和主義（戦争放棄と戦力不保持）、基本的人権を謳う新しい日本国憲法が施行された（一九四七年施行）。曲がりなりの民主主義体制と、言論出版、学問研究の自由とを得て、日本のボンヘッファー研究は、一九五〇年代に始まった。

日本の初代ボンヘッファー研究者は、ほとんどが戦前のバルト主義者とその弟子たちである（雨宮栄一、村上伸、森岡巖）。現在も日本バルト協会のメンバーは、ほとんどがボンヘッファー研究会のメンバーでもある。これは日本独自の現象のようである。^⑪

戦前のバルト研究者、たとえば信濃町教会高倉徳太郎牧師（一八八五—一九三四）とその後任の福田正俊牧師（一九〇三—一九九八）、そして信濃町教会員の松尾相（なすく）（一九〇三—一九三八）、橋本鑑（かがみ）（一九〇三—一九四三）、さらには、メソジスト系の鈴木正久牧師（一九二—一九六九、一九六七年に日本キリスト教団議長として「戦責告白」を出した）、東京大学の法学部教授たち（南原繁「二八八九—一九七四」、堀豊彦「二八九九—一九八六」）は、遅くとも一九三〇年代からバルトの動向を見守り、ドイツ教会闘争の情勢をすでに入手していた。^⑫ なんと一九三九年には、「二—メラーの生涯」のことも紹介されている！。^⑬ それにも拘わらず、多くのバルト研究者は、残念ながらバルトとは違って、政治的には活動しなかった。バルトや教会闘争について知りながら、戦争中には非政治的に沈黙を守ったり（隠遁型）、あるいは国策に追従して「協調型」路線を生きた日本のバルト主義者の中ではあったが、その良心的キリスト者は、敗戦後、ドイツの事情を知るにつれ、ドイツ教会闘争におけるバルトを再確認し、ボンヘッファーと出会い、衝撃を受けた。^⑭ 彼らの戦争責任に対する厳しい自己批判と悔い改めから、戦争責任を担う形としてボンヘッファー研究（村上、森岡など）、ドイツ教会闘争研究（雨宮）への取り組みが始まった。

日本のボンヘッファー研究の主流は、ドイツにおける研究を直接汲んだものであって、アメリカ人宣教師を通して紹介されたものではなかった。^⑮ 日本のボンヘッファー研究の特徴は、現在も原典に忠実であること、ドイツ流のアカデリズムを今も踏襲していることである。もちろんアメリカの神学を通じた研究も紹介されているが、ドイツ語圏以外のボンヘッファー研究の成果を見落としかねない危険性はある。

ボンヘッファアの一次文献は、六〇年代に、重要なもののほとんどが見事に邦訳出版されている（九巻の『ボンヘッファー選集』）。しかも、『服従』（「主に従う」、「キリストに従う」）や『共に生きる生活』などの敬虔の書は、二つの出版社（ルター派の聖文舎と新教出版社）から、それぞれ異なる訳者（岸千年と森平太および森野善右衛門）によって邦訳出版されている（本稿注15を参照）。日本のキリスト者は、敬虔なボンヘッファアを愛し、『服従』や『共に生きる生活』をよく読む。福音的キリスト者たちは、ボンヘッファアの従事した暴力行使を伴うヒトラー暗殺クーデタや過度の政治的関与に対してアレルギーを示すが、それにも拘わらず『抵抗と信従』（「獄中書簡集」）をもよく読む。それには理由がある。逮捕されて以降、獄中のボンヘッファアには、およそ政治的発言を残すことは許されなかった。たとえ政治的発言があったとしても、それは暗号化した内容であった。少なくとも遺稿となった『獄中書簡集』には政治的テーマが描かれていなかったからである。それに対して、社会的政治的問題に深く関与する社会派のキリスト者たちは、『倫理』（「現代キリスト教倫理」）を好んで読む。

現在では、日本のChristian Kaiser Verlag社（現Günterslohr Verlagshaus）と言われる新教出版社が、ドイツのボンヘッファー関係の翻訳を一手に出版している。言うまでもなく、すべてドイツ語からの邦訳である。邦訳出版されている主要二次文献のほとんどすべてがドイツの研究書である。

日本のボンヘッファー研究でとりわけ言及すべきは、森平太（森岡巖、元新教出版社長）によるボンヘッファアの伝記『服従と抵抗への道―ディートリヒ・ボンヘッファアの生涯』（新教出版社、一九六四）である。彼のボンヘッファア伝は、本国ドイツのベートゲによる伝記（千頁にわたる大伝記Dietrich Bonhoeffer Theologe-Christ-Zeigenisse）が刊行される一九六六年より二年も早く、しかも日本で出版され、ベートゲすら驚いた。ジャーナリスト森岡巖氏の力量がいかなく発揮され、現在でもアカデミックな研究に耐える研究成果である。また森岡氏によつて『新版ボンヘッファー全集』の説教集の邦訳もなされている。¹⁶⁾

七〇年代に、ボンヘッファー研究に必要な基礎資料がすべて整い、ボンヘッファー研究は開花した。日本人研究者による伝記的単行本だけでも、雨宮、村上、森野などのボンヘッファー研究会メンバーによる三冊が存在する。¹⁷⁾ またベ

トゲの大伝記（四巻）、その後邦訳されたボンヘッファーの小伝、グレンメルスの写真による伝記も邦訳され、現在では、森平太の伝記を含め、少なくとも七種類以上の日本語で読める伝記が存在する。¹⁵⁾

戦後、初代のボンヘッファー研究者たちは、政教分離と象徴天皇制、非武装平和主義（憲法九条）といった政治・社会的問題と取り組み、七〇年代には、隣国韓国におけるキリスト者民衆による民主化闘争を支援してきた。¹⁶⁾七〇年代末には日本ボンヘッファー研究会が設立され、国際的な研究交流（とりわけドイツと）の広がりを見せた。八〇年代末には韓国のボンヘッファー研究会も設立され、日韓の研究交流へと発展した。¹⁷⁾またその間には、ボンヘッファーの邦文文献表も作成され、その主要文献は国際ボンヘッファー研究会編の『国際ボンヘッファー文献目録』にも掲載されている。¹⁸⁾八〇年代以降、ドイツ語圏や英語圏で日本人によるボンヘッファー研究の博士論文が書かれた。残念ながら、海外で書かれた博士論文は、ほとんど日本人の目に触れることがはない。九〇年代以降になると、かつてのボンヘッファー・ブームは去ったが、堅実な研究は続けられている。

日本で出版された邦文のボンヘッファー研究の単行本としては、山崎和明（二〇〇三）、森野善右衛門（二〇〇五）、鈴木正三（二〇〇六）、宮田光雄（二〇〇七）の包括的研究がある。森野氏と鈴木氏は、神学者であり牧師である。森野氏は、一九八六年以降のボンヘッファー研究を、ボンヘッファーの十字架神学というテーマでまとめた。¹⁹⁾鈴木氏の研究は、二〇〇六年時点までのヨーロッパにおける最新ボンヘッファー研究の成果を吸収した研究となっている。²⁰⁾宮田氏と山崎は、ともに神学者ではなく政治学者であり、きわめて包括的で政治思想・社会倫理的研究を行っている。山崎の研究は、『服従』で描かれた「服従の倫理」が、「抵抗の倫理」を描いた「倫理」の中に、「再建の倫理」として止揚され組み込まれていることを指摘し、ボンヘッファーにおける政治的抵抗と平和主義とは矛盾なく統合されていると解釈した。²¹⁾また宮田氏の研究は、神学的にも政治学的にも世界的に最高を極めている。とりわけ、天皇制とナチズムの比較の中で明らかにしたボンヘッファー研究は珠玉である。²²⁾

現在、新教出版社から出されているボンヘッファーに関する翻訳・研究書だけでも優に五〇冊以上ある。日本ボンヘッファー研究会は、目下、九〇名程度の会員を擁し、毎年、研修研究会を開き、特にドイツとの研究交流を重ねている。

これまでドイツから、ベートゲ夫妻（一九八一年四月）、テート教授夫妻（一九八四年一〇月）、モルトマン教授夫妻（一九九六年）、ファイル教授夫妻（二〇〇一年九月）、ブッシュ教授（二〇〇二年秋）、近年ではクラッパート教授夫妻（一九九三年、一九九八年以降たびたび）を招聘してきた。東京では、毎月定期的にボンヘッファアの原典の読書会が継続されている。定期刊行物としては、『ボンヘッファア研究』年誌が二六年続いている。

三 韓国

朝鮮半島は、一九一〇年に日本に併合されて以降、一九四五年八月一日の日本の敗北まで、大日本帝国の一部であり、日本の統治下にあった。戦後、南北に分断され、朝鮮戦争を経験し（一九五〇年六月二五日勃発、一九五三年七月二七日に停戦）、南北の緊張関係は続いた。南の李承晩反共独裁政権（一九四八―六〇）は、不正と腐敗に反対する学生・市民による四・一九革命で李承晩が亡命し、その後、軍事クーデタによって朴正熙軍事独裁政権が長期に支配した（一九六〇―七二）。六〇年代末頃から民主化闘争が繰り広げられ、朴大統領の暗殺（一九七九、一〇、二六）後、全斗煥政権下での光州事件（一九八〇）、盧泰愚政権による「民主化宣言」（一九八七、六、二九）をへて、ようやく実質的な民主化と自由化への道を歩み始めた。朝鮮戦争や戒厳令下の不幸の続く中、基本的人権も保障されず、言論・出版、学問・研究の自由や発展も望みえなかった。

韓国の宗教人口は、日韓併合当時の一九一〇年、人口一三二万人弱のうちキリスト教徒は二〇万人（人口比一・五％）、プロテスタントが二六万人（人口比二・二％）、カトリックが四万人弱に過ぎなかった。しかし、一九三八年には、人口二一九五万人のうち、プロテスタントが七〇六万人強（人口比三三％）、カトリックが二三九万五千人強（人口比一一％）、ギリシャ正教が一万三千人弱であった。²⁷⁾プロテスタントとカトリックを合わせたキリスト者人口は実に四三％以上になっていた。キリスト教への帰依は、日本帝国主義への抵抗の証しでもあった。二〇〇五年現在、韓国（人口約四八〇〇万人）のキリスト者は、プロテスタント一八・三％とカトリック一〇・九％とを合わせて約三〇％弱で（一

三七六万人)、仏教徒二二・八%をしのぐとされている。なお儒教は〇・二%に過ぎない。韓国は、アジアにおけるキリスト教国と呼べる。

韓国で最初に文献としてボンヘッファーが紹介されたのは、一九五七ないし五八年という。²⁸⁾ボンヘッファーは、日本の場合と異なり、主にアメリカ人ないし米国宣教師を介して、英語ないし英訳からの韓国語訳で紹介された。²⁹⁾軍事独裁政権下でボンヘッファーについて研究し、発言・執筆することは、相当の危険を冒すことであった。韓国民主化闘争の象徴で、逮捕・弾圧された金芝河の『良心宣言』(一九七五)にもボンヘッファーの名前は言及されている。しかし、まさにそれゆえ、ボンヘッファーは、韓国民衆と神学にとって魅力的な人物そしてテーマであった。ボンヘッファーは、「歴史の証人」、「殉教者」として紹介され、受け止められてきた。そのため、敬虔なボンヘッファーの著作『共に生きる生活』(文益煥訳、一九六四)や『服従』(ホヒョク、Hu Hyuk, Heo Hyuk?)訳、一九六五)がまず六〇年代に紹介された。

韓国におけるボンヘッファーへの関心は、(1)同時代史的関心、(2)現実政治への関心、(3)神学的関心の三点に要約される。以下三点について説明する。

(1) 同時代史的関心から、戦前の大日本帝国の支配下で日本帝国主義に抵抗した殉教者たちに対して、反ナチ抵抗の神学者・牧師ボンヘッファーの抵抗と信徒の生涯を投影した(高範瑞、³⁰⁾一九六四)。

韓半島に、パウル・シュナイダーのような抵抗の殉教者、朱基徹(チユキテョク、二八九七—一九四四)がいた(李章植、³¹⁾「ボンヘッファーと朱基徹」一九七三)。朱基徹は、神道儀礼の神社参拝を偶像崇拜の罪であると明言して拒否し、一九三八年に神社参拝は宗教ではないと説得した日本基督教団統理富田満と対立し、一九三九年に牧師を免職された。教会も解散させられ、四度の投獄により五年間も獄中にあり、拷問の末、平壤刑務所で殉教した。実際、日本帝国支配下にあった一九三九年に、「外国人宣教師は全部朝鮮から追放され、投獄された牧師・キリスト者二千余名、廃止された教会二百余、獄死者五十余名にのぼった」という。³²⁾

(2) 現実政治への関心とは、軍事独裁政権下の弾圧に耐え、抑圧にあえぐ民衆の「民主化闘争」の中で、(政治的)

抵抗へのエネルギーとその論理と倫理をボンヘッファーから得ようとしたものであった。

韓国民主化闘争は、一九六九・七〇年ころから七〇年代に、軍事独裁政権の弾圧に対して自由と民主主義を求める学生・知識人によって担われ、抑圧され虐げられている民衆の側に立つ市民的抵抗（「韓国キリスト者宣言」一九七三）が展開された。その先頭には常に韓国キリスト者がいた。「解放の神学」から深い影響を受けてカトリックに入信した詩人金芝河は、「神学と革命の統合」を目指していた。こうした韓国キリスト者による政治・社会への関与には、ボンヘッファーの思想と生涯に対する関心が深く関わっていた。実際、「反独裁・民主化闘争」の最中の一九七四年、孫奎泰（韓国ボンヘッファー研究会初代会長）によって『倫理』が翻訳出版された。

（3）ボンヘッファー神学への関心から、虐げられ抑圧される民衆と連体し共に闘う韓国民衆は、韓国独自の歴史的背景に立つ土着の思想を取り込み、韓国民衆自身が主人公である「民衆神学」を展開させた。

民衆神学は、韓国民主化闘争と共に形成された。それに先つ一九六七年には『獄中書簡集』が高範瑞によって韓国語訳されていた。朴鳳琅（パクボンラウ）の『キリスト教の非宗教化 ボンヘッファーの研究』（一九七五および一九九八）には、ボンヘッファーの「非宗教的解釈」、「深いこの世性」、「成人した世界」といった神学概念に対する関心が現れている。それらの概念は、欧米から韓国に移入されたキリスト教の「非宗教化」や福音の「土着化と政治化」を後押しした。³¹キリスト教に韓国独自の歴史的遺産と土着の思想が加わることで、抑圧された民衆の側に立つて民衆と共に歩む民衆の神学が確立されていた。「解放の神学」の影響に加えて、ボンヘッファーが民衆神学の形成に与えた影響は否めない。しかし今では、民衆神学の継承者たち自身が、ボンヘッファーを含む西洋の神学的影響を否定している。確かに、「民衆神学」は、ボンヘッファーのキリスト中心主義的神学とは全く異なる神学であると言わねばならないほど独自の神学を形成している。

現在、韓国のボンヘッファー研究には、七〇年代、八〇年代の旺盛さはないとしても、出版物を見る限り依然として関心は続いている。二〇一〇年現在、韓国中央図書館で著者名やキーワードで検索・入手できるボンヘッファー文献には、単行本で三十数冊ほどある。ボンヘッファーの著作（一次文献）の韓国語訳としては、『共に生きる生活』（一九六

四、一九八六、英訳より）、『服従』（一九六五、一九九〇、英訳より、二〇〇二、二〇〇四、二〇〇七）、『倫理』（一九七四）、ヘートゲ編『抵抗と信従』（一九九五、二〇〇九）、『創造と墮落』（一九七六）の五冊のみである。その他には、『キリスト論』（一九七九）に関する小冊子や抄訳風の訳書もあるが、残念ながらボンヘッファーの著作のアカデミックで体系的な翻訳紹介とはなっていない⁽³²⁾。

二次文献の韓国語訳については、Donald Goddard, *The Last Days of DB* (1977) 'Renate Wind, Dem Rad in die Speichen fallen. Die Lebensgeschichte des Dietrich Bonhoeffer. Belz und Gelberg/ Weinheim und Basel, 1990 Taschenbuch 1995 (1994英訳45)' Kenneth Hamilton, *Life in one's stride: A short study in D. Bonhoeffer* (1994) 'Mark Divine, *Bonhoeffer speaks today: following Jesus at all costs* (2007) 'E. Behnge, *Dietrich Bonhoeffer* (2006) 'Mary Glazener, *Cup of Wrath: A Novel Based on Dietrich Bonhoeffer's Resistance to Hitler* (2006) 'Ben Alex, *Dietrich Bonhoeffer the Pastor who followed Christ to the Cross* (2007) などの伝記の韓国語訳がある。またボンヘッファー研究の韓国語訳には、John D. Godsey, *Theology of DB* (2006) がある。

韓国におけるボンヘッファーへの神学的関心を読み取れる研究書（モノグラフィ）としては、朴鳳琅『キリスト教の非宗教化 ボンヘッファーの研究』（一九七五、一九九八）、イ・ヒョンギ (Lee Hyon-Gi) 『教会と社会 ボンヘッファーの作品を中心にして』（*Church and Society in Dietrich Bonhoeffer 1987*）パク・ジェスン (Pak Je-Sun or Park Je-Seon) 『神なく神の前で ボンヘッファーのキリスト論的神の理解』（一九九二）、カン・ソンモ『この人を見よ ボンヘッファーの生と神学』（二〇〇六）などがある。

こうした韓国におけるボンヘッファーの受容と影響を見れば、ボンヘッファーがアカデミックな研究対象としてではなく、信仰の糧のための敬虔な読書対象として捉えられていると考えるべき（たとえば、John W. Matthysews, *Anxious souls will ask. The christ-concepted spirituality of DB*）。また、ほとんどがドイツ語原典から直に訳されておらず、英訳からの重訳か、原典も明示されないままの翻訳もある⁽³³⁾。

今後も、一九八九年から始められた日韓のボンヘッファー研究交流の継続が期待される。

四 台湾

日清戦争（一八九四―一九五）の結果、台湾は、一八九五年に清国より大日本帝国に割譲された。以降、敗戦まで五〇年間にわたって大日本帝国の領土であり、その統治下にあった。一九四五年の日本の敗戦と同時に、蒋介石の中華民国国民党軍が台湾支配を開始した。中国本土において国民党軍は、毛沢東率いる共産党軍との内戦で、一九四八年に敗れ、大陸からの撤退を余儀なくされ、政府機能を台湾に移した。台湾では、戒厳令下、開発独裁が強行された。蒋介石・蔣経国父子の死後、初めて自由選挙によつて選ばれた李登輝總統によつて、一九九六年にやっと実質的な民主化への道が始まった。

台湾（二三〇〇万人）の主要宗教である仏教と道教は、二〇〇三年現在、それぞれ五四八万人（人口比二四％）と四五四万人（人口比二〇％）である。それに対して、二〇〇六年現在、カトリックは約三〇万（人口比一・三％）、プロテスタントは約六〇万（人口比二・六％）と、キリスト教徒は四％弱に過ぎない。その意味では、台湾の宗教的国民性は、興味深いことに、韓国よりも日本に似ている。

自由化と民主化の実現に伴い、台湾におけるボンヘッファー研究は、聖書学、神学、哲学を対象にする（漢語キリスト教学研究）を土台に、情報ネットワークをフル活用し、グローバルな研究を目指している。台湾をベースに、香港、マカオ、中国その他の漢語圏にもネットを広げている。その活動拠点は、中原大学（Chung Yuan Christian University）である。同大学のチン・ケンパ教授（Prof. Dr. Chin, Ken Pa）の提唱で、二〇〇六年にボンヘッファー研究会が立ち上げられた。前段として漢語キリスト教学研究会が二〇〇五年一〇月には、ボンヘッファー生誕百周年を記念し、ユルゲン・モルトマン（J. Moltmann）教授を招き、セミナーを開催した。

二〇〇六年三月には、「キリストと世界」と題して、漢語圏の国際ボンヘッファー研究会が開催され、ドイツからミヒャ

エル・ヴェルカー (Michael Welker) ハイデルベルク大学教授が招待されている。これらの研究会の成果を踏まえ、二〇〇八年に漢語圏のボンヘッファー研究者たちによる英文と独文の論文集 *D. Bonhoeffer und Sino-Theologi* が発行された。同書は、同大学宗教研究所に属するチェン・トーマス教授 (Prof. Dr. Thomas Tseng) とアメリカのクリフォード・グリーン教授 (Prof. Dr. Clifford Green) が編集を行い、海外のコメンテーター (たとえばドイツのクリスティーネ・ティーツ [Prof. Dr. Christine Tietz] マインツ大学教授、その他) からそれぞれの論文に対して寄せられた「論評」も掲載され、国際的な学術交流をなした。

個別の研究としては、Tang Siu-Keung 教授 (香港中文大学) の真理を語ることについての倫理学的考察は、儒教との絡みもあって興味深い^⑤。今後のさらなる研究成果を待ちたい。台湾におけるボンヘッファーへの関心は、概ね、彼の政治的に関与する神学と、他者のために存在するキリスト教 (神学) 理解とにある。

現在、チェン・トーマス氏を中心に、ドイツやアメリカに留学していた研究者たちが協力し、二〇名ばかりが国際的なボンヘッファー研究を続けている。しかし、漢語圏のボンヘッファー研究は緒にたばかりである。実際、台湾国立中央図書館のデータ・ベースにも、ボンヘッファー関連文献は、上掲書を含め五冊のみである。具体的には、一部のボンヘッファーの一次文献と伝記 (韓国同様に、K. Wind) の漢語訳もあるが、今後の充実に期待したい。また漢語圏での国際的学術交流にとどまらず、東アジア圏の日本や韓国のボンヘッファー研究会との国際的学術交流が始まることも期待したい。

注

(1) 国際ボンヘッファー学会に属するドイツ・ボンヘッファー学会による *Bonhoeffer Handbuch*, Mohr Siebeck/Tübingen 2010 の出版が企画され、その中の「アジアにおけるボンヘッファーの影響と受容」の項を山崎和明が担当することになった。本稿は、そのドイツ語原稿の拡大版であると同時に、今後のさらなる研究の基礎研究

となるものである。

- (2) 日本ボンヘッファー研究会設立の経緯とその歴史については、たとえば、日本ボンヘッファー研究会編『ボンヘッファー研究』二〇号、二〇〇三年を参照。

- (3) 日本におけるボンヘッファー受容とその影響については、すでに二〇〇六年ボンヘッファー生誕百年を記念したドイツ(ベルリン・シュパンダウ)における国際ボンヘッファー学会で山崎和明が報告した(Um Gottes willen für die Welt, Dietrich Bonhoeffer in Japan. Wahrnehmungen und Wirkungen. In: *Internationaler Bonhoeffer Rundbrief* 82, März 2007, sowie auch 四国学院大学『社会学研究科紀要』七号、二〇〇七年三月)。その後、草稿を改訂し、二〇〇八年にボンヘッファー家の夏の家のあつたフリードリヒスブルンで講演した。その邦訳に、「神のゆえに、世のために——日本におけるD・ボンヘッファーの受容とその影響——」(四国学院大学『論集』一二八号、二〇〇九年三月所掲)がある。

また日本におけるボンヘッファー受容の研究の基礎になった研究には、ドイツにおけるボンヘッファー研究史と日本のそれとを比較した山崎の「ボンヘッファー研究史」(同『D・ボンヘッファーの政治思想史 抵抗と再建の論理と倫理』新教出版社、二〇〇三年)およびそこに挙げた参考文献を参照。

- (4) ボンヘッファーについては、拙稿「反ナチ抵抗牧師の決断—ヒトラー暗殺・クーデタ計画—」(金城学院大学『キリスト教文化研究所紀要』第八号、二〇〇四年三月)を参照。

- (5) 宮田光雄編『ドイツ教会闘争の研究』創文社、一九八六年、三七二頁、同、『権威と服従 近代日本におけるローマ書十三章』新教出版社、二〇〇三年、特に一七九頁以下。森岡巖「高倉徳太郎とその継承者のバルト神学受容の現実と問題」(バルト神学受容史研究会『日本におけるカール・バルト 敗戦までの受容史の諸断面』新教出版社、二〇〇九年所収)、とりわけ「日本基督教会とドイツ教会闘争」二〇一頁以下参照。

- (6) 同書、キリスト新聞社、一九五九年、三二〇頁参照。

- (7) 宮田光雄『ボンヘッファーとその時代 神学的・政治学的考察』新教出版社、二〇〇七、とりわけ「ボンヘッファー

と日本——政治宗教としての天皇制ファシズム」三五二頁を参照（その独文にM. Miyta, *Die Freiheit kommt von den Tosa-Bergen*, Verlag Otto Lembeck, Frankfurt a.M. 2005にも所収）。

(8) ホーリネス・バンド弾圧史料行会編『ホーリネス・バンドの軌跡 リバイバルとキリスト教弾圧』新教出版社、一九八三年、七一七、七三六、七六八、七八四頁参照。

(9) 一九三九年六月二一日、灯台社の明石順三以下九一名、朝鮮半島では三〇名、台湾では九名、合計一三〇名が一斉検挙され、うち五二名が起訴されている。

(10) 雨宮栄一・森岡巖編『罪責を担う教会の使命』新教出版社、一九八七年、一八〇、一八二、一九四頁参照。

(11) 日本の初代ボンヘッファー研究者たちが日本バルト協会の創設にも関わっている。日本バルト協会の設立は、バルト生誕百年を記念した一九八六年五月に小川圭治氏を中心に、雨宮栄一、村上伸氏等数名の発案によるものと言われている。

(12) 注5を参照。

(13) 一九三九・四〇年以降は、国家統制が厳しくなりバルトや教会闘争について紹介されなくなったという（森岡巖「高倉徳太郎とその継承者のバルト神学受容の現実と問題」、上掲書所収、一九六頁）。

(14) たとえば、森岡巖氏（森平太）は、*Das Dorf auf dem Berge, eine Gegebenheit. Erzählt von Peter Holzschuh, aufgeschrieben von Otto Bruder*, 5. Aufl. 1946 Evangelischer Verlag/ Zollikon-Zürichに記録されたドイツ教会闘争で戦う教会の姿に深い感動を覚え、その後のボンヘッファー研究につながったという。上記の邦訳は、ブルーダー著（森平太訳）『嵐の教会』（新教出版社、一九六〇年）として刊行された。なお、この抄訳は一九五九年五月から一九六〇年一月まで『福音と世界』に連載された。

(15) 山崎が調査した限り、確かに、日本で最初にボンヘッファーを紹介したのは、D・A・グラッグストン著、小林信雄訳（共に関西学院）『弟子足ることの代価 ドイツ一殉教者の手記』（基督教徒兄弟団『兄弟』一六号、一九五〇年一〇月）である（拙稿「D・ボンヘッファー邦文文献表一九七八年」『大阪市立大学『法学』』二六巻、

一号、一九七九年六月参照)。

『兄弟』は、関西学院大学の雑誌ではなく、元学院長であった久山康氏の主宰する「国際日本研究所内」の「基督教学徒兄弟団」が発行しているA六版ほどの小さな月刊誌である。『兄弟』が日本におけるボンヘッファー研究に与えた影響は、限られている。実際『兄弟』では、その後、五〇年代に、二度ばかり山本和がボンヘッファー（かつ）に関する短文を記しているだけであり、日本のボンヘッファー研究の源泉と迄は言えない。むしろ日本のボンヘッファー研究を紹介・展開させた主流は、新教出版社の月刊誌『福音と世界』である。またその後、関西学院で活躍したボンヘッファー研究者としては、船本弘毅氏とその堅実な研究が挙げられるにとどまる。

日韓のボンヘッファー研究の比較を行っている小杉尅次氏は、「戦後東アジア社会とDietrich Bonhoeffer」(同『現代東アジア論の視座』お茶の水書房、一九九八年)で、次のように語っている。

「五〇年と五七年に、ボンヘッファーの思想(厳密には「人となり」)が、日本と韓国に、活字化された形式をとって初めて紹介された。ところが、いずれも英語(ボンヘッファー著作の英訳書)から、日・韓国語に翻訳され、それぞれの社会に紹介されている。これは、戦後日本、および韓国史に決定的方向づけを与えたアメリカの存在なしには、考えられない事態である。しかも、ボンヘッファー自身の著作翻訳として、日・韓国両国共に『共なる生活』(Gemeinsames Leben)が最初に位置づけられているが、この事実は、個人の内面的・倫理的の世界を、常に信仰の本質的ことごとくとして理解するアメリカ的・ピューリタン(清教徒)的信仰理解が、日本でも韓国でも等しく継承されてきている、という東アジア・プロテスタンティズムの性質と信仰理解を如実に物語っている」(一八七頁以下なお二三一頁以下も参照)。

韓国におけるボンヘッファー研究の成果については、小杉氏から多くのことを学び、彼に依拠する点が大であるが、日本のボンヘッファー受容に関しては、彼の理解に多少の事実誤認がありそうである。

すでに本文でも検討したように、日本では、アメリカの宣教師やアメリカの文献の影響を受けてボンヘッファー研究が緒についたわけではなかった。従って、韓国の場合はともかく、戦後日本のボンヘッファー研究は、「日本、

および韓国史に決定的方向づけを与えたアメリカの存在なしには、考えられない事態で」はない。

日本では、戦争責任問題やドイツ教会闘争と関連してボンヘッファーが受容された。新教出版社の『福音と世界』誌上では、ボンヘッファー著作のなかでも、まず獄中書簡集の『抵抗と信従』（一九五五年一月より）が部分的に倉松功訳によって紹介され、『倫理』（邦訳では『現代キリスト教倫理』）の一部が（森岡巖訳か編集部訳で一九五七年九月）、そして森野善右衛門訳による『共に生きる生活』（*Gemeinsames Leben*）が部分的に紹介されはじめ（一九五七年一月より）、その間に、『服従』（邦訳では『キリストに従う』。またその英訳である『弟子たることの代価』）も紹介されている（一九五九年四月）。したがって『共に生きる生活』が最初に訳されたわけではない。

ボンヘッファーの邦訳単行本をとつてみても、堀光男訳『誘惑』（新教出版社、一九五八年）が最初に邦訳出版され、ルーテル派の出版社であった聖文舎（二〇〇八年破産）刊、岸千年訳『交わりの生活』一九六〇年（森野善右衛門訳『共に生きる生活』新教出版社、一九六八年、文庫本になったのは一九七五年）、森野善右衛門訳『現代信仰問答』新教出版社、一九六一年、生原優訳『創造と墮落』新教出版、一九六二年（後にボンヘッファー『聖書研究』選集Ⅸ巻所収、一九六五年）、森野訳『現代キリスト教倫理』（選集Ⅳ巻）新教出版社、一九六二年、聖文舎刊の岸千年訳『主に従う』（上下二巻）一九六三年（森平太訳『キリストに従う』（選集Ⅲ巻）新教出版社、一九六六年）、大宮溥訳『聖徒の交わり』（選集Ⅰ巻）新教出版社、一九六三年、倉松・森岡訳『抵抗と信従』（選集Ⅴ巻）新教出版社、一九六四年、以下省略）。

以上のように、「ボンヘッファー自身の著作翻訳として、日・韓国共に『共に生きる生活』（*Gemeinsames Leben*）が最初に位置づけられている」という「事実は」間違っている。また単行本になった翻訳書でも、『共に生きる生活』（*Gemeinsames Leben*）が最初の邦訳ではない。そうすると、そこから引き出される小杉氏の結論にも疑問が寄せられる。

(16) 『ボンヘッファー説教全集』として三巻が発行された。これは、DBWの中から「説教、説教黙想、礼拝式文、合

わせて一・二編を網羅したもので」六〇年代に既に訳されていた選集第八巻の五一編に新訳六一編を加えた三巻となつている（森岡巖、森野善右衛門「書評『ボンヘッファー説教全集』全三巻新教出版社、二〇〇四年」森野『歴史を生きる教会 この世の旅人・寄留者として』「上毛通信」10年 一九九六年八月―二〇〇六年三月）福音企画印刷、二〇〇六年所掲）。畑祐喜・森平太訳『ボンヘッファー説教全集1 一九二五―一九三〇年』新教出版社、二〇〇四年、大崎節郎・奥田知志・畑祐喜訳『同2 一九三一―一九三五』同、二〇〇四年、浅見一羊・大崎説郎・佐藤司郎・生原優・畑祐喜訳『同3 一九三五―一九四四』同、二〇〇四年。

(17) 雨宮栄一「D・ボンヘッファー」（『キリストの証人 抵抗に生きるⅡ』教団出版局、一九七四年）、同『二人の平和主義者の殉教 H・シュテールとD・ボンヘッファー』新教出版社、一九九五年。

森野善右衛門「ディートリヒ・ボンヘッファー」（『現代を動かす人と思想』毎日新聞社、一九七五年）。村上伸『ボンヘッファー 人と思想』清水書院、一九九一年。

その他、宮田光雄「抵抗と信従 ボンヘッファーの生涯と思想に学ぶ」（『現代をいかに生きるか』教団出版局、一九七七年）、なお、宮田光雄『ボンヘッファーとその時代 神学的・政治学的考察』新教出版社、二〇〇七年にも伝記的叙述がある。

(18) 以下すべて新教出版社より。大伝記としてE・ベートゲ『ボンヘッファー伝Ⅰ 神学の魅力』（村上伸訳）一九七三年、『同Ⅱ・Ⅲ キリスト者たるの価（上・下）』（雨宮栄一訳）一九七三年、『同Ⅳ ドイツの運命への参与』（森野善右衛門訳）一九七三年。そして小伝として、エーバハルト・ベートゲ、レナーテ・ベートゲ『ディートリヒ・ボンヘッファー 現代キリスト教の源泉1』（宮田光雄・山崎和明訳）一九九二年。写真伝としてエーバーハルト・ベートゲ、レナーテ・ベートゲ、クリスティアン・グレルムス編『ボンヘッファーの生涯 写真と著作による評伝』（高橋裕次郎訳）一九九二年がある。

(19) 金芝河は、「あなたたち日本人は常に、私たちが必死になつて反対しているものを必死になつて支援しており、私たちが必死になつて守ろうとしているものを必死になつて蹂躪している」（韓国問題キリスト者緊急会議編『韓国

民主化闘争資料集 一九七三—一九七六』新教出版社、一九七六年、一三頁）と厳しく批判するが、同書などの記録に残されているように、良心的な日本のキリスト者による支援があった。

(20) 日韓のボンヘッファー研究交流に関しては、森野善右衛門「和解と平和の福音を担って（一九八八—九五）——

日本ボンヘッファー研究会の歩み——」（『ボンヘッファー研究』二〇号、二〇〇三年）および森野「日韓キリスト者の責任ある連帯を求めて」（『ボンヘッファー研究』八号、一九九一年）などを参照。

(21) 山崎和明「D・ボンヘッファー邦文文献教 一九七八年」（大阪市立大学法学研究科『法学雑誌』二六卷一号、一九七九年）、同「D・ボンヘッファー邦文文献表 一九七九—八八」（四国学院大学『論集』七〇号、一九九八年）の二資料がある。

(22) Vgl. *Internationale Bibliographie zu Dietrich Bonhoeffer*, hg. von Ernst Feil, Chr. Kaiser/ Gütersloher Verlagshaus, 1988. 邦文文献担当は山崎。なお、韓国語は、Kyo-o-Tae Sohn（孫奎泰）氏（韓国ボンヘッファー研究会初代代表）が担当した。

(23) 森野善右衛門『告白と抵抗 ボンヘッファーの十字架の神学』新教出版社、二〇〇五年。

(24) 鈴木正三『キリストの現実に生きて ナチズムと戦い抜いたボンヘッファー神学の全体像』新教出版社、二〇〇六年。

(25) 山崎、上掲書（注3）参照。

(26) 宮田光雄『ボンヘッファーとその時代 神学的・政治学的考察』新教出版社、二〇〇七年。

(27) 朝鮮総督府宗教統計を用いたデータ、工藤英勝「日本キリスト教の朝鮮布教」『宗教研究』三二七号二〇〇二年所載（川瀬氏の開いているサイト「朝鮮布教統計表」からも利用できる）。

(28) 小杉、上掲書（注15）一八七および一七八頁を参照。Vgl. a. K. Kosugi, *Eine Studie über die Rezeption der Theologie Dietrich Bonhoeffer in Ostasien. Am Beispiel des Nachkriegsprotestantismus in Japan und Korea von 1945 bis 1975*. (Dissertation der Uni. Hamburg) 1983, S.75.

- (29) 小杉、邦文上掲書、二二二頁参照。
- (30) 飯沼、上掲書、二二五頁からの再引用（オリジナルは金良善『韓国基督教解放十年史』一九五六年、四三頁）。しかし、「日本福音キリスト教会連合」の罪責告白では、「一九三九年、朝鮮では約二千人の牧師、信徒が投獄され、二十余の教会が閉鎖され、五十人の牧師が獄死しました。太平洋戦争に入ると、さらに三千人の牧師、信徒が投獄され、うち五十余名が獄死、二百余の教会が閉鎖されました」という（『福音と世界』一九九五年九月号三九頁）。
- (31) 「事件」、「視座」、「生の座」、「非宗教的キリスト教」の概念を語り、福音を政治的（この世的）に解釈すること、この世の政治・社会への関与を引き出す神学であった。徐南同、安炳茂らは、韓国民衆の現実の戦いの場から生み出される神学を目指した。
- (32) たとえば、ベートゲ編『中心であるキリスト（ティートリヒ・ボンヘッファーのキリスト論）』（一九八一、一九九英訳より）、Charles Ringma *Seize the day with DB: A 365 Day devotional* (2004), 『私は何者か』（二〇〇五）、『詩編 聖書の祈禱書』（二〇〇七）、『待降節説教』（二〇〇八）などがある。
- (33) その他、三点を紹介すれば、「歴史・疎外・抵抗・革命」（一九八二）、「弟子の道と十字架」（一九九九）、「十字架の復活の黙想」（二〇〇三）、「詩編黙想」（二〇〇四、英訳より）がある。
- (34) 小杉、上掲書 [注15] 二二二頁以下および二二二、二二七頁も参照。
- (35) An Ethical Case of "The Son Concealing the Misconduct of the Father": The Postmodernity of Bonhoeffer's Ethics. In: Clifford Green, Thomas Tseng ed., *Dietrich Bonhoeffer and Sino-Theology*, 2008, Chung Yuan Christian Univ./ Taiwan.